

## ニラ栽培における株元灌注剤の農薬残留

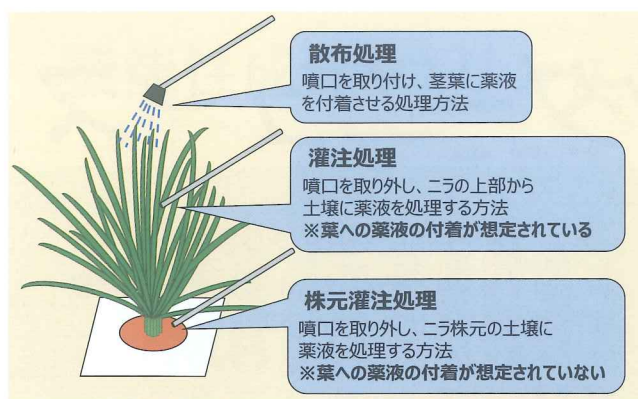


図1 散布、灌注、株元灌注の処理方法の違い

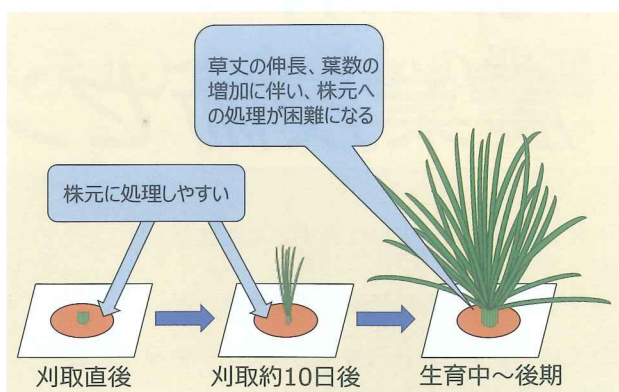


図2 刈取後のニラ生育のイメージ

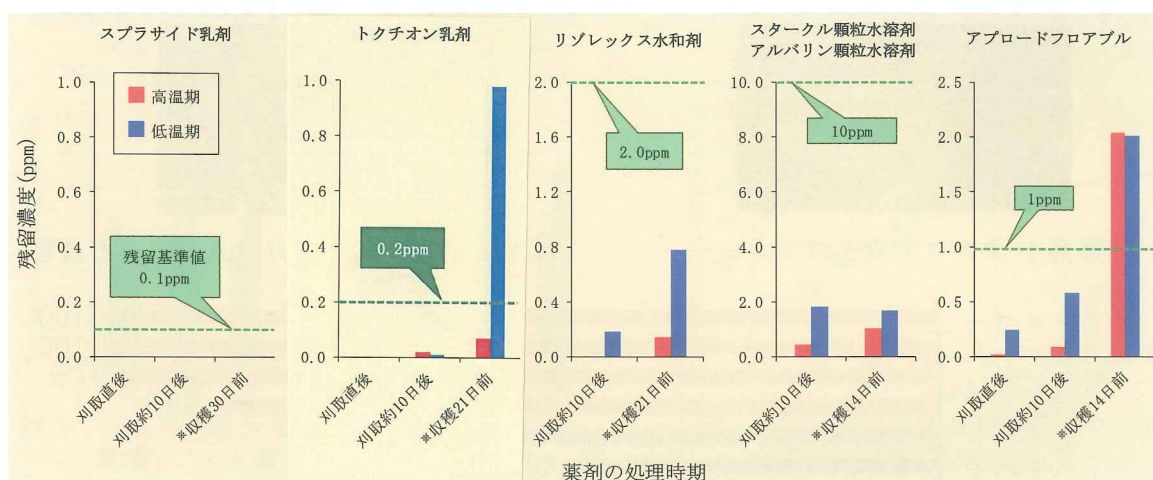


図3 ニラの葉に薬液が付着した場合の収穫時の残留濃度

- 注1) 各調査期間中におけるハウス内温度の平均値は、高温期で19.9~28.6℃、低温期で13.6~16.4℃であった。  
 注2) 各剤とも、登録内容のうち単位面積当たりの農薬成分投下量が最も多くなる条件で1回処理した。  
 注3) 収穫所要日数は、スプラサイド乳剤とトクチオン乳剤の低温期で62日、その他は全て40日程度であった。  
 注4) 残留基準値は、公益財団法人 日本食品化学研究振興財団 残留農薬基準値検索システム参照(2020年10月20日現在)  
 注5) ※は登録内容の使用時期の内、最も遅い時期に該当する。

ニラで使用できる農薬には、散布剤や灌注剤などがありますが、灌注剤には様々な使用方法があり、使用時にはラベルをしっかりと確認しなければなりません。中でも、株元灌注剤は、薬液が葉に付着しないことが前提となっているため特に注意が必要ですが、その一方で、薬液が葉に付着した場合のリスクは明らかになっていません(図1、2)。

そこで、「株元灌注」で登録のある5農薬について、高温期と低温期に分けて、薬液が葉に付着した場合の残留調査を実施しました。

その結果、まず、高温期よりも低温期

で残留濃度が高い傾向が認められました。次いで、刈取後約10日以内に薬剤を処理した場合は、残留基準値の超過は確認されませんでした。しかし、トクチオン乳剤およびアプロードフロアブルでは、登録内容の使用時期を遵守しても、基準値超過が確認されました(図3)。

このことから、「株元灌注」で登録された農薬は、葉にかからないように処理する必要があります。ニラの生育中～後期は株元への処理が困難なことから、刈取後の早い時期に処理することが望ましいと考えられました。

(農薬管理担当 森田展樹 088-863-4915)